

レ・ガン・ゴルバチヨフ会談が間近に迫っている。この会談は、中東の緊張緩和に一定の役割を果たすだろうといわれている。もちろん、どの地域もどの時代もそこに住む人々、政治勢力の主体的意思・志向性がなりよりも決定的要因であり、外的因素は副次的なものにすぎない。「米ソの代理戦争」として情勢を力学的に見てしまい、そこに住む人民の主体的な力を主軸としない分析は、かならず見通しを誤らざるを得ないだ

1. アンマン合意の破産  
——“PLO抜き”の企て

中東和平の試みは、今新たな段階を迎えており、米国・イスラエルによるPLOの実体解体と「PLO抜

き」の「和平」策動がますます露わになっている。そうした状況下、アラファトはフセイン、ムバラクとの会談後「カイロ宣言」（資料①参照）を発表し、武装闘争を被占領地に限ることを宣言した。他方、ヨルダンのフセインは、「和平」四段階案を提案し、実質PLO抜きの和平を進める姿勢を一方で示しつつ、他方ではシリアとの関係改善を進めている。

これらのこととは、中東和平をめぐる政治攻防が、これまで一定程度PLOを軸にしていた時代から、国家の枠組みの中で進行しようとしていることを示している。これは、八二年以降、人民戦争路線から、国家的外交政治解決をめざしたアラファト路線の弱点の露呈として現局面があるといえる。PLO、パレスチナ解放勢力は、この危険な状況の中での政治的軍事的実体解体の企みを露



## 第6号

発行 ウニタ書舗  
東京都千代田区神田神保町1-52  
TEL. (03) 291-5533

編集 J.R.A.  
郵便振替 東京1-48443  
三菱銀行神保町支店 当座9012656  
会員制 年会費20000円

## 目次

転換期に立つ「中東和平」.....	1
アラファト議長の「カイロ宣言」資料①.....	6
「イスラエル首相」ペレスの（国連演説における）和平への七項目提案 資料②.....	7
なぜ人民議会か？ 資料③.....	7
PLOの危機にもかかわらず 資料④.....	8
PFLP声明 資料⑤.....	10
ダマスカス三者合意に関するレバノン共産党の見解 資料⑥.....	10
ホベイカへの大いなる合意 資料⑦.....	12
「三者協定、もろいもの」カマル・シャティラ、語る 資料⑧.....	14
レバノン・アミン・ジェマイエル大統領の国連外団関連協議会での演説 資料⑨.....	16
新たなキャシング戦争の可能性とそれを避けるためのPFLPの主張と立場 資料⑩.....	19
アサド大統領、国民に演説、第1回米州諸国アラブ系国際会議会幕にあたって 資料⑪.....	20
激動の中東ドキュメント・1985年10月8日～11月10日.....	25
10月号追加資料、「LF（レバニーズ・フォーシズ）は、ファランへ党から独立している」.....	29

の方法ではこれまで通りやつていけない状況になつてゐる。アラファトが亡命政府の役割に進めば進むほど人民の解放勢力としてのPLOの役割はPNSFの力に統合され、ますますPLOは分解していくことになる。

振り返れば、八二年PLOのベイルート撤退、八三年トリポリキャンプ戦争とアラファト部隊のトリポリ撤退、アラファト・ムバラク会談、八四年の分裂下のPNCアンマン開催、八五年アンマン合意と進んできたアラファト路線は、政治的にはPLOの代表権を保持しつつも、そのつど軍事的実体を弱体化してきた。その分、政治交渉を重視じ、アラファトヘゲモニーによるヨルダン・エジプト統合をめざし、ヨルダン・エジプトとの共同強化に傾斜し続けてきた過程であつた。中東で、八二年以降レバノンを始めとする反帝反イスラエルの闘いが高揚し、新しい展開が問われたが、アラファトは政治交渉の付属的位置に人民武装闘争を位置づけ、それを変更せずにきた反イスラエルの高揚の中で依拠すべき大衆基盤を弱め、国家の政策展開にその穴埋めを求める構造を作り出した。アラファト個人の人気はある

が、路線的には破産した状況を導いている。今、ヨルダン・エジプトと共に共同というより、そのイニシアチブに従うのか否かという形で、アラブのイニシアチブは弱められている。PLOとして、今問われていることは、PLOの統一的実体を回復し強化し、PLOの代表権を堅持し、シリア・レバノンとの関係改善を始め、アラブ諸国総体との関係強化によって、反米反イスラエルの立場を明確にし、反イスラエルの闘い、とりわけ被占領地での闘いの支援を民族的にも国際的にも強化していくことであろう。

離れを力で実現しようとしている」と言っている。また、こうした敵の策動を容易にしたのは、アラファートのアンマン合意による反帝反イスラエル戦線からの逸脱にあるとして、PLOの実体的政治的イニシアチブづくりをめざしている。とくに、アンマン合意以降、修復不可能となつたPLO内の二つの路線に対し一つのPLOという組織形態による解決へ転化すべきではない、という立場に立って、PNSFの第二-PLO化に反対してきた。そして、PLO内に人民議会（資料③④参照）をつくることによって、下からの反帝反イスラエルによる統一を呼び掛け、左派のヘゲモニーによるPLOの再統一をめざしている。もちろん、それはアラファートのカイロ宣言によつて、ますます難しい事態を迎えている。（PFLPは、武装闘争継続宣言によつて、アラファートのカイロ宣言を批判した）（資料⑤参照）。

アラブ人民の中で、現在ますます反米反イスラエルの声は高まっています。イスラエルは、PLOの実体解体のために、占領地内のパレスチナアラブ人に対する弾圧を一層強化している。ガザにおいては、外出禁止令が続けられ、住民はストライキを

もつて抵抗を続いている。西岸のナブルスにおいては、ユダヤ人右翼に襲撃され、両足を切断せざるを得なくなつたバッサム・シャカーピ氏が市長職を剥奪されて以降あいていた市長にイスラエルのいう「パレスチナ人代表」たり得る人物が任命され、イスラエル軍の撤退を求めるアラブパレスチナ人青年たちのデモ・集会に対する苛酷な弾圧が続いている。銀行融資を受けるユダヤ人入植者たちに比して、イスラエルの経済破綻の影響を最も受けるのは、被占領下のアラブパレスチナ人である。経済危機は抵抗の拡大・尖鋭化をつくりだしている。PLOを中心に、民族自決、民主国家の建設の道の明確化こそ、人民の闘いを支える最善の力だろう。

## 2. レバノン安定の努力と阻止策動

離れを力で実現しようとしている」と言っている。また、こうした敵の策動を容易にしたのは、アラファートのアンマン合意による反帝反イスラエル戦線からの逸脱にあるとして、PLOの実体的政治的イニシアチブづくりをめざしている。とくに、アンマン合意以降、修復不可能となつたPLO内の二つの路線に対しても、PLOという組織形態による解決へ転化すべきではない、という立場に立って、PNSFの第二PLO化に反対してきた。そして、PLO内に人民議会（資料④参照）をつくることによつて、下からの反帝反イスラエルによる統一を呼び掛け、左派のヘゲモニーによるPLOの再統一をめざしている。もちろん、それはアラファートのカイロ宣言によつてますます難しい事態を迎えている。

もつて抵抗を続いている。西岸のナブルスにおいては、ユダヤ人右翼に襲撃され、両足を切断せざるを得なくなつたバッサム・シャカーリ氏が市長職を剥奪されて以降あいていた市長にイスラエルのいう「パレスチナ人代表」たり得る人物が任命され、イスラエル軍の撤退を求めるアラブパレスチナ人青年たちのデモ・集会に対する苛酷な弾圧が続いている。銀行融資を受けるユダヤ人入植者たちに比して、イスラエルの経済破綻の影響を最も受けるのは、被占領下のアラブ・パレスチナ人である。経済危機は抵抗の拡大・尖鋭化をつくりだしている。PLOを中心に、民族自決、民主国家の建設の道の明確化こそ、人民の闘いを支える最善の力だろう。

わにした。米・イスラエルにならって英国外相は、ヨルダン・パレスチナ（PLO）代表団との会合を突然中止した。その理由は、英國側がPLO代表に対し、イスラエル承認と「テロ」非難を文書で確認することを強要したためといわれている。ここに、PLO・ヨルダンのアンマン合意が含みとしてもいたものの明確化を問われ、イスラエル承認を踏み絵とする帝国主義の一方的 requirement の前で、政治交渉が壁にぶちあたつたことを意味した。そして、その後アンマンで行われたアラファト・フセイン会談は、形式的にアンマン合意継承を確認しているが、フセイン側はアンマン合意をPLO側が台無しにしたという立場に立っている。そこで、フセインは、新しい方向を模索し始めた。他方、アラファト側近のアブ・イヤドはフセインとの会談後、アンマン合意は破産したと表明している。

イスラエル側は、この機に乗じてペレス中東「和平」七項目提案（資料②参照）を国連で発表した。それは、ヨルダンに焦点をあてて、個別交渉を積極的に進める意向を表明している。フセインは、それに応えるよう、レバノンゲレバで「日立

四段階方式を提起している。ペレスの七項目提案はとくに目新しいものではない。ただ、ヨルダンに行つてまではぐる「和平」交渉を始めようという姿勢は労働党首ペレスが首相の座にある間に交渉を進めようという意思の現われである。他方、フセインの四段階方式の提案は、PLO抜きで米国との「和平」交渉から開始することを明らかにした。つまり、第一にヨルダン代表団と米代表との会合、第二に PLO の明確なイスラエル承認、第三にヨルダン・パレスチナ代表団と米交渉者との会合（国連安保理と全当事者を集めた国際会議の枠内で）、第四に直接「和平」交渉というものである。ヨルダンは、これまで米国・イスラエルに対しては「国際会議」を盾にし、PLO に対しては PLO 抜きには直接交渉をしないとし、アラブ諸国に対してはアラブサミットの諸決議・アラブの総意に準ずるとして、巧みに生き延びつつ、独自のイニシアチブを形成しようとしてきた。カサブランカサミットでは、アンマン合意に対するアラブ諸国の支持をとりつけようとしたが、エルサレム問題をもつてアンマン合意は、単独直接交渉を行ひ得ない内容にして見えたし、

加えて米・イスラエルのPLO攻撃によってアンマン合意は破産した。そこで、ヨルダンはPLO抜きの米・イスラエルとの直接交渉の模索と、シリアとの関係回復という表面的には相反する政策を同時に進行させるに至ったのである。

一〇月二二〇、二一日にサウジアラビアのアーリドで開かれたヨルダン、シリアの両国首相の会談は、二二日次の点を確認して終了した。それは①アラブサミットの諸決議に基づき、②フェズサミット決議に基づいて、和平を進める（つまり、国連の下での全当事者参加の国際会議による和平交渉）、③イスラエルとの個別直接交渉は行わない、というものである。そして、両国関係の交流拡大を確認したのであった。フセインはアラファトと別個の独自的外交展開に向かう意思を示し、アンマン合意はヨルダンの側から実質的に破棄されているといえる。

そこで、アラファトは、これまで通りヨルダンとの共同体制を継続するのか、それともシリアとの関係改善に向かうのか、問われているが、現在のところ、これまで通りの路線を進続する、その客観性をもって進化する

ようとしている。アラファートはアキレ・ラウロ号作戦主体を乗せたエジプト機の米軍によるハイジャックの後、「米国は、我々に戦争を宣言した」と発言しているが、その後のヨルダンとの会談はPLOファッタハの主要メンバーを加えてのものだったが、大きな成果はなかった。さらにエジプトでもムバラクとの会談後「被占領地外での武装闘争は放棄する」とのカイロ宣言を発表するに至っては、米国が「亡命政府」化、つまり軍事的実体を放棄し政治的存在としていく方向へと呼応している。このことは、もともとエジプトの主張していたPLOの「亡命政府」化、つまり軍事的実体を解体し、PLOの政治的軍事的実体を解体し、PLO抜きの「和平」交渉を進めようとした、アラブ諸国もまた国家政策の枠内で問題の解決を計ろうとする傾向にある現在、PLOの政府としての役割と統一戦線としての二つの役割を戦術展開によつてうまくはたして危機を乗り越えてきたこれまでの在り方を根本的に問われている。政府としても戦線としても、現在のアラ

一致してセキュリティ・プランを実行する限り、パレスチナ勢力もそれに準じて行うという立場を固めていく。しかし、「まず、パレスチナキャンプから」というのは認められないし、同時になければならない。また、キャンプの保安条件の確立をシリア軍の保護をもって行うべきという立場から、レバノン建国に呼応した努力を続けている。

シリア側は、シリア軍のレバノンへの展開の条件として、今年一月に①全勢力の武装解除、②西ベイльтーのみならず、東ベイルートも含むシリア軍駐留、を主張している。それ抜きに、シリア軍が展開することは、無用な対立と分裂、戦闘の中にシリア軍自身を加えることになり、レバノン安定の戦力になりえないと考えている。

レバノン建国は、人民進歩勢力と右翼との対峙から左派勝利を第一段階とし、第二段階は各リーダーによる国民和解内閣形成とそこでの折衝としてセキュリティ・プランと政体改革の実行を行ってきた。その解決不能の事態の中で、第三段階として軍事指揮権をもつ主勢力の妥協による上からの安定づくりを進めた。現在のレバノン建国の局面は、シリア

アミン大統領に返しつつ、内閣の安定へ返すこと、そしてパレスチナ勢力との合意を進めつつ、セキュリティ・プランの実行上の問題へと至つていくだろう。その分また矛盾を激化させずにはおかない。

### 3. アラブ諸国の動向

シリア・ヨルダンの関係改善は、急ピッチで進んでいるが、ヨルダン同様に、シリアもまた独自的政治展開を国際的レベルで進行させている。それは、アラブで初めて、米州大陸全域のアラブ系議員をダマスカスに招待し、第一回米州アラブ系議員大会を開催したことに示されている（資料⑪参照）。イスラエルは、北米・ラテン米のユダヤ人を動員して、物質的政治的権益を拡大してきた。シオニストは北米のみならず、ラテン米にも深い歴史的関係をもつていてることはよく知られているが、現在もたとえば三カラゲアを包囲する反革命的支援を行っている。これに対し、シリアも大きな政治展開をめざし始めている。シリアの今回の北米・ラテン米アラブ系議員の結束の試みは

アラブ諸国の動向

を媒介に、軍事指揮権による妥協をアミン大統領に返しつつ、内閣の安定へ返すこと、そしてパレスチナ勢力との合意を進めつつ、セキュリティ・プランの実行上の問題へと至っていくだろう。その分また矛盾を激化させずにはおかないとおもふ。

米・イスラエルの政治的軍事的展開に対抗する、国際的な反米・反イスラエルの政治展開として注目すべきことである。

さらに、現在注目すべきは、サウジアラビアの動向である。アラブの「盟主」として、親米の位置に立ちつつ、進歩政権と親米政権への分解をおしとどめようとしている。カサンランカサミットの確認に沿って、今回のシリアル・ヨルダンの関係改善にサウジのアブドラ皇太子の果した役割は大きい。それは、シリア・イラクとの関係改善の可能性をも秘めている。そして、一月三日から六日に、GCCサミットが開かれた。サウジを中心とするこのGCCサミットの決議は、主要に以下のことを採択した。第一に、イラン・イラク戦争の最近の战火の拡大、エスカレートのもたらす危険性を指摘し、イランに対し、ガルフ湾内の船舶の自由航行の保証を求め、第二にメンバー六カ国の戦略的共同防衛の見通しを確認し、集団的共同防衛の枠内で各国の各々の防衛責任をもつこと第三に、中東地域の安定をおびやかす「テロ」行為のエスカレートに対し、「テロ」行為を批判し、共同保全体制を強化すること、第四に、P

LOをパレスチナ人の唯一合法の代表として支持することを再確認し、レバノンの主権・独立・領土保全を支持し、第五に、カサブランカサミットの確認に基づいて、対立する諸国家間の関係改善の努力を継承し、第六に、経済的問題における協力諸協定を確認した。GCC諸国は、石油価格の低落の中で、経済的矛盾をかかえつつ、親米基調に変化はないとしても、米ソのバランスの中で、地域的和平を追求する方向にある。ソ連との国交関係は、これまでメンバーの中ではクウェートのみであったが、一〇月、オマーンが国交を樹立、サウジもソ連との接触がひんぱんになっており、サウジを含め、GCC諸国全体がソ連と国交回復するのには間近いといわれている。

また、ヨルダン・エジプトイニシアチブが政治的に大きくいわれているが、ヨルダンもエジプトもサウジとの関係抜きには経済的にあり得ない程、サウジに依拠している。かといって、サウジはヨルダン・エジプトイニシアチブを支持・支援しきれない。シリアとの協調が必要だからである。サウジはまた米軍が緊急時サウジを基地として使用することを認めてはいる。サウジの軍事力の根

的国家主権を支持すると同時に内戦と他の武装存在を終結させること、LFの合意をまず成立させようとした理由は明らかである。これまでの政治協定は常にレバノンの各派の妥協をはらみ、それを不満として、不斷に戦闘が繰り返され、安定は計れずについた。それゆえ、軍事の指揮権をもつ勢力と政治的に妥結し、軍事的に合意すること抜きには前に進めないし、逆に軍事指揮権による安定を計りつつ、政治的合意を計ろうとしていたわけである。

現在、三者合意案に対し、左派のNUFは支持（ただし、スンニ派は留保点を持っているといわれている）、LFは、当事者として、支持、ただし、草案は叩き台として、最終的でないことを主張しはじめている。

シリアルの立場を明確にした。シユルノンにおいて、レバノン人はなく、真の対話は不可能である」という反国連に参加し、レーガン、シユルツと会談し、急速帰国したアミン・ジエマイエル（資料⑨参照）は三者合意案に対し留保の立場をとっているが、客観的には、反対の立場はいるが、客観的には、反対の立場となっている。LF代表ホベイカがPSP、アマル代表との会合のためにはいるが、客観的には、反対の立場となっている。LFといふにダマスカスに向かわなかつたことも、キリスト教徒右派側の反対にぶちあたつたためといえる。LFというキリスト教の「軍事勢力」がキリスト教政治家・政治団体を無視してシリヤや左派との妥協を求めるることは、アミン・ジエマイエル、シャムーンなどにとって脅威で許すべからざることであろう。シリヤやNUF側は合意成立の遅滞は、米国・イスラエルの妨害によるとして、米・イスラ

政治的経済的行為の極めて重要な開示していくであろう。そして、三者合意が軍事力量を基礎とする上から除外されている左右諸グループや、三者自身も、現在の政治的軍事的力関係を少しでも自己の有利に導くための戦闘が再び活発化する可能性も高まっている。それは、米・イスラエルのつけ入るスキルをつくることにもなり得る。しかし、現在シリアの支援下、NUFが結束する限り、矛盾・対立・戦闘が続くとしても、和平の方向に変わりはないだろう。しかし、レバノン停戦・妥結・安定よりも自己の「発言権の増大」「陣地の拡大」を主目的とする立場で、妥協をめざす限り、安定は、「合意」の端から破られるためにのみ存在することになる。

スチナ勢力の対立は、今年のキャンプ戦争にみられるように、深刻であり、一歩解決を誤まれば、キャンプ戦争の再開ということにもなるだろう（資料⑩参照）。それは敵の望むことである。アミンも「う（資料⑩参照）。それは敵の望むことである。アミンも「う」というように、キリスト教徒マロン派の側は「一九四八年以來の住民、あるいは合法的に居住しているパレスチナ人の滞在は法の下に許される」が、それ以外のパレスチナ人は出ていけ、という立場であり、レバノン国家再建はパレスチナ人民と革命勢力に対する規制が強化されていく方向にある。現状では、五月キャンプ戦争の総括としての六・一八ダマスカス合意に基づいて、レバノン左派とパレスチナ革命勢力との共同を発展させていくことをあくまで追求していくべきだらう。

幹は米軍に握られているが、政治的にはアラブの統一の立場をめざしている。米・ソ・ECに対し、アラブの独自的統一の立場によって、独自的力を育成しようとする分、シリアとの関係は重視されている。今後も、アラブの盟主的役割を果さんとしている分、サウジの動向は注目に倣す。今政治交渉に重点がおかれており、サウジの動向は注目に倣す。アラブの国家政策を軸に包括的和平の方向に、つまりソ連を含めた国際會議の方向に全体は流れている。もちろん、エジプトを軸に米・イスラエルは巻き返しを模索中である。一方に反帝の牽引力をもつシリアと、反動諸国の頂点にありながら、アラブの統一を主張するサウジをもう一方に、包括的和平に流れているのは、米・イスラエルが、PLO解体を進めて、イスラエルとの直接交渉を露骨に推進するためである。ヨルダンもサウジの力の上で、質的には矛盾をもつつ、シリアとの協調が成立し始めており、単独和平は遠ざかっている。しかし、米国・レバノンでの失敗を挽回すべく、イラン・イラク戦争でのイラクへのテコ入れによって、より一層局地戦を激化させ

定を再確認する。それは、すべての被占領地外の軍事作戦、あらゆる形態のテロルを弾劾するということだ。

そして、PLOの全組織が、この決定を守るよう（指導するということ）を）、再確認する。今日をもち、この決定違反者に対し、きびしい処置をとる。

PLOの政策が二方的にならぬよう、国際社会は、イスラエルが国内、国外のあらゆるテロ作戦をやらぬようさせるべきである。

この意味で、イスラエルの土地占領に抗して、すべての可能な手段に訴えてこれらの占領した土地からイスラエルを撤退させるまでパレスチナ人民が闘う事を、PLOは再確認する。外国による占領に抗して闘う

権利は、国連憲章が否定しえるものだ。つまり、紛争解決の手段として力や脅しを使わぬよう唱っているから。パレスチナ人民の反占領抵抗権は、国連、国連諸機構の諸決議、また、ジュネーヴでの合意によつて再確認されている。この間の諸できごとから、敵外部で展開するテロ作戦はパレスチナ人民の大義に影をおとし、自由獲得へむけた当然な闘いを傷つけるものだという事を、PLOは確信するに到つた。

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

資料②

### 「イスラエル首相ペレスの（国連演説における）和平への七項目提案

（資料③）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料④）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑤）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑥）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑦）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑧）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑨）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑩）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑪）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑫）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑬）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑭）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑮）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑯）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑰）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑱）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑲）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料⑳）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料㉑）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料㉒）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料㉓）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料㉔）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料㉕）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料㉖）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料㉗）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料㉙）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料㉚）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料㉛）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料㉜）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料㉝）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料㉞）

（一九八五・一〇・二〇国連総会）

（資料㉟）

なたの意見は？」

P L O は重大な危機下にあるが、その民族的闘いの見通しは広々として有望である。我が英雄的な人民はその民族的目的が完全に達成されるとで闘い続けることをゆるぎなく決意している。

パレスチナ人民の闘いは、全アラブの、そして世界の革命の進行と不可分である。我々は資本主義から社会主義への過渡期、つまり、自由、独立、社会の進歩のために闘う人民の勝利の時代に生きている。パレスチナ人は正義のための闘いは必ず、勝利の中で終ることを固く信じてい る。

我々の正当な権利のための闘い方はたくさんある。我々のやり方は人民戦争である。我々の場合、侵略者シオニストからの祖国解放の合法的な方法として、それは国際法によって承認されている。

他のやり方は、人民の武装闘争と関連した、大衆の中での仕事と政治的、思想的、外交的な活動である。御存知のように、我々は様々の方法を使う。同時に重要なことは、他のアラブ人民が、我々の祖国を取りもどし、我々の独立した国家を建設す

るという我々の目的を率直に支持しているという事実である。国際的支援は民族的愛国的闘いと正義のための世界規模の闘いの弁証法的統一の表明として我々にとって同様に非常に重要である。この統一は社会の進歩と平和のための反帝闘争における共同と協調の努力の表現といえる。そのような統一の必要性が実現されず、無視された時、愛国的な闘いに大きなダメージを与える。それは、我々の地域での人民を分裂させようとしている帝国主義とその追従者を助ける。この連関をとらえると、なぜ帝国主義陣営が、パレスチナ人の誠実で原則的な友人であるソ連の東解決への参加をあれほど阻止しようと努力しているのかの理解にかかる。

被占領地での大衆の抵抗はパレスチナ民族行動綱領の顯著な位置を占めている。これらの抵抗は祖国外での人民の闘いとも密接に結びついている。

両戦線の活動は、パレスチナ人—レバノン人—シリリア人の堅固な同盟の強化に役立つ。この同盟は、アラブの民族解放運動とソ連を筆頭とする世界の革命勢力によって支えられている。

由と本質は何ですか？」

我々の運動、とくにPLO内で明らかになつた不一致の主要な理由は、この最悪時期だった。たとえば他のパレスチナ人指導者とともにダマスカスに行くかわりに、ヤセル・アラファトはあからさまにギリシャに行つた。

PLO指導部内の有力な人物の間には、米解決案を探る傾向が現れたのは、この最悪時期だった。たとえば他のパレスチナ人指導者とともにダマスカスに行くかわりに、ヤセル・アラファトはあからさまにギリシャに行つた。

彼らは、また、彼らを愛國的立場から分裂させ、彼らを中東解決のための米提案に追いつめるため、繰り返しの帝国主義者の企てに影響された。パレスチナ・ギリラが、ペイルートを離れつあった一九八二年九月に、レーガン案が出されたことが思い起こされる。

PLO指導部内に固有の階級的特質のすべてをもつて、一九八二年、パレスチナ・ギリラのペイルートからの撤退時最高潮に達した困難に遭遇した。彼らは、それまでの彼ら固有の闘いの形態が不可能となつた状況に気がついたので、悲観し、幻滅した。

彼らは、また、彼らを愛國的立場から分裂させ、彼らを中東解決のための米提案に追いつめるため、繰り返しの帝国主義者の企てに影響された。パレスチナ・ギリラが、ペイルートを離れつあった一九八二年九月に、レーガン案が出されたことが思い起こされる。

「PLO内の統一回復をどうやって実現しますか?」

PLOの存在こそが我が人民のひとつ的重要な業績であるということをまず最初に強調させてもらいたい。パレスチナ人は彼らの唯一合法的代表としてのPLOのまわりに結集してきた。PLOは我々の抵抗運動の民族的念願を体現している。このことは、パレスチナ人の間でも、国際レベルでも、高い評価をうけてきた。愛国主義と反帝国主義を土台にしたPLOの統一のための、我々の疲れを知らない精力的な闘いの中で、この機構の重要さの理解とこの土台上にそれを強化する必要性から我々は、存在している。

我々の意見では、PLOの統一を回復するために以下が必要である。

- 1 すべての政治表現の中の逸脱路線に対し疲れることなく闘うこと。

2 アンマン合意破棄のために精

このようないい会議が P L O にとって代るもの、あるいは P L O の諸団体に並行する機構へと導かれないといふ事実を指摘することは大変重要である。人民会議はパレスチナ人民の唯一の代表である P L O と矛盾しない。むしろ、それは P L O の唯一の代表権を再確認する。それは、 P L O を正しい路線に帰そうとするものである。

人民会議はすべての民族主義勢力団体、人物に開かれている。それはファタハ、中央委員会の民族主義的カーデルおよびメンバー、つまり米解決案と逸脱路線に反対している人々、アンマン合意を拒否している人々に開かれている。

人民会議のアイデアは P N S F 内で討議されている。それはあらかじめ合意を得ていると言える。パレスチナ共産党はこのアイデアを歓迎した。一九八五年八月七日の P F L P

最近モスクワを訪れたPFLP代表団はこのアイデアについて、ソヴィエトの同志たちと討議した。彼らはこれを歓迎し支持した。彼らはこのような動きを、米解決案および、フェセインー・アラファト合意と対決するひとつの形態として考えた。彼らは、すべての勢力と政治方針がそのような会議に参加すべきである点を強調した。彼らは、PLOの統一を守ることと、帰還自決の実行、独立したパレスチナ国家の建設——というパレスチナ人の権利をうたつたペレスチナ民族綱領の防衛の重要さについて言及した。

王とヤセル・アラファトの合意が結ばれて以来、帝国主義陣営は PLO に率いられるパレスチナ抵抗運動を分裂させようとする企みを続けてきた。PLO に加盟している有力な組織である PFLP の書記長である ジョルジュ・ハバシュ は ニュー・タイムズ 誌のレポーターと PLO が今日直面している問題について語る。

アラブ人民の唯一の合法的代表であると主張している原則に、帝国主義者とシオニストの計画に調和するアンマン合意は現実にはパレスチナ抵抗運動の分離取扱い政策を強要し、悪名高いキャンプ・デービッド取り引きとレーガン案の最終承認を強いるためにもくろみ、我々の運動を崩壊に導く。

そのような合意の実際の結果は地域レベル、全アラブレベル、国際レベルで、PLOの尊厳と威信を著しく傷つけ、PLOの隊列に分裂を拡大し、我々の愛国的闘いの目的を危険にさらし、PLOのこれまでの成果を無効にすることである。アンマン合意を批准することによって、PLO指導部の有力な人々は、事实上、アメリカ人とその地域の分離取扱いに同意した。

PLOの危機にもかかわ  
らず——ジョルジュ・ハバ  
シュ PFLP議長

抗運動の基本路線からの著しい逸脱であるとみなす。それは P L O の二つの基本原則に違反している。

第一には、パレスチナ・アラブ人が、彼らの祖国に帰る権利、独立国である権利を宣言している P L O

と P C C P の共同コミュニケの中に、  
人民会議召集合意が記された。D F  
L P はこのアイデアに反対していな  
い。D F L P は会議を成功させるた  
めのいくつかの質問をした。我々は  
他の勢力にも接触し、このアイデア

資料④  
P.L.O.の危機にもかかわ  
らず——ジヨルジュ・ハバ  
ショ P.F.L.P議長  
八五年一〇月二四一  
・タイムズ誌(四一号)

抗運動の基本路線からの著しい逸脱であるとみなす。それは PLO の二つの基本原則に違反している。  
第一には、パレスチナ・アラブ人が、彼らの祖国に帰る権利、独立国家である権利を宣言している PLO

レバノン危機は国際化しなくて  
も、一国レベルで解決しうるか  
できる。なぜなら、レバノン危機  
には、二つの側面がある。第一は、  
内的側面で、レバノンの政治・経済  
・社会システムがそれである。第二  
は、レバノンと、レバノンをとりま  
く直接的な環境のつながりとしての  
合法的関係である。外的側面と考え  
てもらいたい。

勢力内の足並みが乱れていることをみて、他の党派（相手方）は合意に本腰で取り組まないからだ。レバノン民族派党派間の団結、これとアガ与えてくれる基本的な支援、これらなくして交渉を成功に導く事はできない。

レバノン危機は国際化しなくては、一因ソベレッジ解消のうらみ

眞面目のわざであつたとしても、合意した妥協は、味方側の人々が満足できないものであり、エリ・ホベイカはこの合意実践を保証できないといふ事にしかならない。おまけに、この合意に当初反対した連中の惡意を考え外において考えて、そういう事にしかならないのだ。

三者合意の展望

弟であるナビーハ・ベリ、ワリド・ジュンブラットが代表している人々にしたら、二人がかちとった政治的妥協も最低レベルに到達していないし、エリ・ホベイカが代表する人々にしたら、エリ・ホベイカが与えた妥協は巨大かつてものめないものにみえている。どうぞ事だ。だから、

#### 4. 民族會議について

積極的な役割を含めて、そういう支援を必要としているのだ。

おまえが何を嫌がるか、おまえが何を喜ぶか?

张してきた潮流のリーダーの一人で、親イスラエル・レバノン関係強化を主張し、親欧米主義潮流のリーダーの一人なのだ。レバノンをここまで破壊したのは、このアラブからの孤立、親イスラエル、親欧米主義で

○内のすべての愛国者、民主主義者と團結すること。

唯一、精力的な大衆の政治的思惟的な闘いによってのみ、パレスチナのアラブ人民は、PLOを背信の道へ追いやうとする現在の企みをうち砕くことができる。愛国主義と、帝国主義、シオニズム、反動に対する非妥協の闘いを土台に團結せよ——これが我々のスローガンである。

PFLP声明（八五・一・八）

資料⑤

カイロ声明といわれる昨日のヤセル・アラファトの声明について、PFLPの政治局スポーツマンは以下のように声明する。

この声明は、その政治内容、タイミング、場所などから、そのねらいは右派指導部が米国政府およびイスラエル指導者から出されている条件である、武装闘争の放棄を、キャンプ・デービッド政府エジプトと合意

.....

国と人民に対するテロリズムの張本人と、イスラエルというパートナーが一緒になったのである。米政府とまつたく同じである。

パレスチナ人民の闘いはどんな時もテロではなかつた。我々の人民はあらゆるテロを非難している。なぜなら、我々パレスチナ人自身が、米イスラエルのテロの犠牲者のひとりだからである。そして、今なお、世界の無実の平和主義者の生命に対するあらゆる行動を非難している。PFLPはカイロ声明を、アラファートが、清算解決の中で、自らと自らの政治路線を守るために、敵のあらゆる目的を受け入れてゆく路すじで採つた大きなステップとして見る。

PFLPは、カイロ声明の当事者の絶望的イニシアティブにもかかわらず、パレスチナ人の武装闘争は、我が人民の目的を実現するまで続くであろうことを、我が人民および世界の平和、友愛、正義を愛する人民に確認する。

ダマスカス三者合意に関するレバノン共産党の見解——ジヨルジュ・ハウイ  
議長が答える

1. 問題の中心は、合意そのものであります。私自身は、ダマスカスで行われた交渉に直接参加していない分、詳細についてはよく知らない。ただ、我々が信頼をおくる民族派二組織が交渉に参加しており、交渉自身は、この危機の解決を断固めざすシリアの監督下に行われている。我々は、シリアのこうした決意を全面的に信頼している。しかし、我々レバノン共産党は、合意交渉・合意成立、その後の進展などについて、明確な立場を堅持しており、交渉について、どんな幻想も持っていない。我々は、合意内容の詳細について何ら反対はないが、成功裡に実践され、妨害策的な条件下で合意が成立したものではないという事が、事実として存在している。

NUFリーダーのみで交渉がなされたが、それよりもNUFから選出された有能な代表が味方を代表し、相手方からも、やはり交渉への責任動から合意を防衛しぬくような理想的条件で合意が成立したものではない。この交渉成功を阻むもう一つの最

大難問は、民族派党派（アマルとPSP）が、この党派が代表している世論にとって不十分かつ最少にみえること。一方、LF（レバニーズ・フォーシズ）が代表する世論には力がもはやないし、分割状況を一時的にでも改善していく能力も失っている。

この交渉成功を阻むもう一つの最大難問は、民族派党派（アマルとPSP）が、この党派が代表している世論にとって不十分かつ最少にみえること。一方、LF（レバニーズ・フォーシズ）が代表する世論には力がもはやないし、分割状況を一時的にでも改善していく能力も失っている。

4. 民族会議について

いかなる情況において民族会議を開催するにもせよ、合意の内容をめぐる討議が必要だと信ずる。我々は、全員が参加する国民会議開催をようびかける。カミーユ・シャムーンは、ダマスカス合意の基本を了承する人すべてが、そういうレバノン市民の開催場所、構成、展望について彼の見解は、知れわたっている。彼は、レバノンの孤立主義の主唱者・主導勢力の一人であり、

積極的な役割を含めて、そういう支援を必要としているのだ。

フランジエは、関係者の自分を閉め出して三者合意を成立させたとか評しているが、彼が交渉に入つてこなかつた以上、直接関係していい事になる。そういう意味なら、我也交渉の直接関係者ではない。だが、この三者合意がレバノンの運命に関連する性質であるという範囲において、フランジエも我々も関連していくという事になるわけだ。

5. ダマスカス合意を妨害し、流産させようとしているのは誰か？

イスラエルとアラファト議長であろう。さらに、米国も。米国は、レバノン内の米同盟者、レバノン政府レバニーズ・フォーシズのミリシアまた、他の方面に配置した親米勢力をあらねよう妨害活動を続けようと指揮している。そうすれば、仕方なく情況が民族派、進歩主義陣営に優利にならぬよう、妨害活動を続ければ、時間をかせぎ、それをつきつけていている。時間がかせぎ、

イスラエル、米国のそういう努力は水泡に帰そう。なぜなら、レバノンは、イスラエル、米国の影響力の大方面を駆逐し、今後さらに一掃していくのだから。そして、パレスチナ右派はこの地域で孤立していくしかなく、トリポリで大打撃を蒙ってしまった。

質問・LFリーダーのエリ・ホベイ  
カの演説でのキリスト教徒への統一  
の呼び掛けは、追放されたクリスチ  
ヤンへの慰めと、停戦に反対してい  
る者たちの身元を明らかにすること  
だと言われていますが、あなたの見  
解はいかがですか。

アブ・ブラー・デル…私はLFの執行  
委員会委員長の演説はたくさんの方々の肯  
定的見解を述べていると考えている  
私にとっては、演説は情報研究セン  
ター竣工式以前にデル・カマル市で  
のワリド・ベイ・ジュンブラットの  
演説に答えたと同意義のものだと思  
う。その機会にジュンブラットは危  
機の解決と戦争の終結について述べ  
た。私はエリ・ホベイカの演説は基  
本的に同じだと思う。演説は平和を  
拒否する者への警告で構成されてお  
り、クリスチヤンの政治的位置の再  
確認の表明だ。ホベイカは目的を達  
成しつつあるシリアの兄弟に度々言  
及している。これは平和と通商そし  
て治安維持の強力な決意の表明だと  
思う。このことは、彼がミッセル  
・サマーハとアサド・シャフタリを  
ダマスカスに送り我々の兄弟である  
アマル運動と進歩社会主義党との会

談で実証されたと思う。さらにはオペーイカがカツダムからのダマスカス訪問の招待を受け入れたことは平和的方法で問題を解決することへの強力な決意と戦時国家状態を終結させるさらなる決意の表明である。

質問..貴方がホベイカの最後の演説に同意していると確認していいのでしょうか。

アブ・ファーデル..彼のすべての意見に合意している。シリアの兄弟と共同している限りにおいて彼を信じる。我々は、何の証拠もなくとりざたされたイスラエルとの過去の関係をすべて断つたのだから、最後には地元に帰つて来た放蕩息子と考えている。またレバノンはアラブの外脈だつたり、アラブの統一のために努力するアラブ諸国やシリアルとの柔軟な関係なしには生きていけないと考えている。なぜなら、我々の間にイスラエルという敵が存在しているからだ。正直に言えば、敵イスラエルからのみ危険はレバノン・キリスト教徒に向かつて来るといえる。

彼が、我々レバノン人を第二のイスラエルにするつもりはないと言ったが、その意味は、イスラエル人とその代理人がレバノンにいる事を拒否するという事で、彼が何もいわなかつたのはこのためだ。

アブ・ファーテル…前回と違うものになると思う。今回は現状を認識するのが大きな目的だから。アミン大統領は国連総会出席演説のためにシリアルのアサド大統領と副大統領と共に会って三者会談（アマル、PSP、LF）の結果の詳細を知りたいのです。アミン大統領は、レバノンに以前のような静かさを取り戻したいと考えているので、平和と安全の道についてシリアの兄弟との間に争いが起る事はない。大統領と軍についてとくに言っておかなければならぬ事がいくつかある。軍は最近、とくに二週間前の、南部郊外の砲撃を批判されてきた。他の人々には軍は単純に報復されただけだといわれている間に、軍の砲撃を大統領が停止させなかつたと言っている。しかし、軍が報復をタンクと一五五ミリ砲を使わず攻撃されたのと同水準の武器でした時、大統領は停止命令をだしたのだった。

資料(7) ホベイカへの大いなる合意——アブ・ファー・デル語る

L.F.(レバニーズ・フォーシズ) 執行委員会委員長であるエリ・ホベイカの一〇月一四日、日曜日の演説は、一つの法以上での有効な肯定的なものだったと国会副議長のムニール・アブ・ファーデルは「マンデーモーニング」に言っている。彼によると、演説は、デル・カマル市でのワリド・ジュンブラット氏の演説に応えたように見えるし、演説内容はきわめて似通っているもののように思えるということである。アブ・ファー・デルはホベイカのほとんどの見

ホヘイガへの大いなる意  
意——アブ・ファーデル語る

六

統領が閔与していたことを暗示するものだったことを示している。アブ・ファーデルによれば、彼はLFとアマル運動そして進歩社会主義党によってシリアの首都で合意に達した停戦協定はただちに履行されるものだと信頼しているということである。そして誰もそれを破棄する機会はない。なぜなら交戦中の各派が公式的に承認したものだからということである。彼はベイルートとサイダで戦闘が開始されるとは考えていない。トリポリの教訓があるからだとのべた。

以下の記事はアラビア語で彼を行ったインタビューの翻訳である。

レバノン治安維持書式を決定的態度で確認した。今はシリアに助けてもらっているが、我々のレバノンに平和がきて元に戻ればこんどは我々がシリアを援助するだろう。我々は分離しがたい双子のような関係にある国だからだ。

質問..それは三派の政治協定が脅か  
されているという意味ではあります  
のか。  
アブ・ファードル..そうは思わない  
三党参加での決定とシリアル副大統領  
アブデルハリーム・カッダムのアド  
バイスは多くの確實な可能性を持  
っているからだ。まず、戦争に関  
与しているすべての武装勢力に戦争  
停止を呼び掛け、戦争は終わらなけ  
ればならないことを悟らせなければ  
ならない。国民会議開催以前にすべ  
ての派閥に接触が持たれ、戦争を統  
制しなければならない。今停戦の白  
い煙が上がっている事と痛恨の惨事  
以前の治安状態に戻るべきだと告げ  
いからだ。

味方内の大リーダー暗殺、党内鬭争で党の大混乱をおこすなど敵側が情況の攪乱策動を強化する事を十分予測せねばならない。また、イスラエル、SLAのラハドなどが、トリポリの敗北を挽回すべく、南部のジヤジーン、サイダで混乱をおこそうとしているのも明らかだ。そうなれば、また、困難になるのだが、味方の側が大同団結し、挑発を避け、再建をめざしていくば、のりきつてい

解を分け合っているし、彼を、何の証拠もなくイスラエルと共同していだとされる仕事から最終的に自分の領地に帰還した「放蕩息子」のようなものだと述べた。

会議で宣言された戦争終結の最終協定ではさらなる戦闘の可能性を含むようになるが、それは戦闘終結の現実的失敗を意味するものですか。アブ・ファーテル・君の言う協定成立という意見には反対だ。今日（一〇月一七日）か明日、協定は完全に履行されるだろう。なぜなら抗争中の各派は、公式に停戦を確認しているし、停戦監督もすると確認しているからだ。それだからシリアも停戦

停戦に必要有効な各派が参加して協定を結んだからだ。もしレバノン軍が破る事があれば、新手の民兵組織の登場という事になるだろう。大統領と軍司令官は停戦妨害を止めさせねばならない。他の会議未参加の武装勢力に関して言えば、大半は協定を承認しているし守ると思う。だが重要な事を一つ覚えておかなければならない。それはこの地区のイスラエルの代理人どものことだ。イスラエ

アブ・ファーデル…私の知る限りでは、訪問は交戦派閥が決定した事項の承認と事実確認だけのためだ。国際会議は焦眉の課題だ。ダマスで開催されるだろうこの会議にシリアはレバノンの指導者を招請するでしょう。

質問…一ヶ月以内の期間に開会召集があると思いますか。

アブ・ファーデル…あると思う。

質問…米国の広報官ペルナルド・カルブは、ワントンでレバノンの平和と安全に向けた前進を歓迎していますが、あなたの米国の立場についての見解はいかがですか。

アブ・ファーデル…世界中が理解すべき事は、アメリカの立場はこの東アラブにおいてイスラエルを支えているということである。我々は、アメリカから寛大な感情を受け取ったが、けれども、さらにより具体的な影響と真剣な顔の様子とは別のものだった。我々が援助を要求したら、イスラエルに与えて我々からは取り上げていったのである。心に受ける影響をしたら、まず始めに米国は我に犠牲を払うよう requirement をして来たのだった。我々が援助を要求したら、イスラエルに与えて我々からは取り上げていったのである。心に受ける影響をしたら、まず始めに米国は我に犠牲を払うよう requirement をして来たのだった。

質問…アラブ主義に反対したグループによるものだからだ。それはレバノンの自由と統一と孤立、そしてアラブ主義の大義のために死んだ殉教者の血を忘れないためなのだ。

アブ・ファーデル…そうだ。

質問…貴方は「シユービヤ」(shū, しゅ)（アラブ諸国の特権を拒否する、初期のイスラム共和国の一つの運動）という言葉をよく使われます。貴方がたとPSPとの間に共同がありますか。

シヤティラ…我々UWP（労働人民勢力連合）とPSPの間には共同で存在しない。ベイルートでは相互の協定は破棄されているが、衝突は起きていない。一方、アマル運動の一グループは六月一七日にわが方の公共の建物を襲撃、略奪した。そしてそれらはアマルの指導者の指揮によるものだった。また、南部郊外の我が家兄弟は、襲撃されたり投獄された。三者協定を隠れ蓑にしたアルの指導者たちは、テロの手段を持つてLFとの左右両翼の協定を確立するために策動している。そして、LFによって完成しているベイルートとその郊外の支配地区を確立せんのは、それが自由を妨害する以外のものでもないからだ。我々の反対の理由は、それが過去一〇年間、ほとんどのグループが我々が統一を求める分割主義者と孤立主義者たちと戦っているあいだに、地方分権の美名の下に分割を導いたり、最もレバ

アブ・ファーデル…私はラハドの過

つであつた。その後すぐには、中東の環境は変化したのです。一九四八年のイスラエルの建国は大量のパレスチナ難民をつくりました。最終的に五〇万の難民が、この地域で三〇〇万の人口を持つ最も人口過密な国レバノンに到着したのです。

この地域の立憲政治制度は、アラブ・イスラエル戦争にはあまりに旧式のかかわり方をじたと思われるごとによつて次から次へと崩壊を始めたのです。アラブ民族主義とアラブ社会主義は、パレスチナ人とアラブの政治的病弊の解決を求める民族改革者によつて伝導されました。アラブ人たちは、彼らのど真ん中に、力によつてイスラエルが建国された事に自尊心を傷つけられたのです。その後のアラブ・イスラエル戦争によつてさらに屈辱は深くなつたのです。一九六七年のアラブの敗北のあとにパレスチナ抵抗運動がその優先権と方法論をもつてアラブ民族主義の前衛部隊として出現したのです。それは一九七〇年にヨルダンで足場をつくろうとして失敗しました。しかし、その後レバノンで軍隊と軍備、警察力、政治機構その他をもつ事により国家の中の国家を造り、足場づくりに成功したのです。それはレバノン

人からも同盟者をつくり大きくなつていいました。それはレバノンの国土的な身分証明と国家の弱体化の問題をつくりだしたのです。この異常事態は、制限を受けずに大きくなつてしまつたのです。レバノンは多極的な国家です。一つのグループの軍隊化は、他のグループをもそうしてしまいました。結局、全大組織がパノンでは民兵をもつに至ります。イスラエルと国境を接している諸国と接していない諸国は、レバノン民兵組織を財政援助することで、彼らを通じてイスラエルとの代理戦争を行っています。イスラエルも、パレスチナ人とレバノンの他のアラブ人とが戦う事に便宜を感じています。彼らはレバノンの内戦が露骨なアラブとの戦争対立の危機の解消に役立っていると考えているからです。この地域の問題は、結局、レバノンの内部問題の形をとつて表われているのです。この問題は、疑う事を知らないレバノン人を戦争の継続に導きました。その後全面戦争になる事を悟らせる事になったのです。それは同盟の変更と、戦争目的の変更をもつて進みました。第二次世界大戦まで、東アラブはヨーロッパの広大な政治的領土でした。英國とフランスは圧倒的

な影響力を行使していました。戦争がこの二大勢力を、中東の政治的な抗争から手をひかせた後、この地域からのヨーロッパの影響力は急速に役割を交代させました。米国はイスラエルを支持しました。同時に、アラブ諸国との友好関係を維持しようとした。一〇年間に二回のアラブ・イスラエルの戦争は、米ソ間に時には軍事衝突の危機をもたらす対立をも生みました。米国のイスラエルへの軍事的支援は、ソ連のシリアとパレスチナへの軍事的援助によって均衡が保たれました。中東問題解決に向かった協定締結への二大超大国の無力さは、各政党に、制限はあるとしても相互が戦争をするに十分な自由活動の余地を与えたのです。レバノンの戦区はこれらの限界の内にあります。中東問題に関して、近づきつつあるレーガン・ゴルバチョフ首脳会談での対立解消を切望します。そのような緩和は、レバノンの緊張緩和を助けるものだし、他の要因においてもレバノン国家のその国家制度の強化に寄与するでしょう。唯一そのような制度のみが、長く続いている罪悪

行為を、つまり罪なき市民を人質にしたり、誘拐したり、乗っ取ったりといったものを効果的に制圧することに大きな可能性をもつものだと確信します。レバノン内戦は、国内、地域そして国際の分野の要因からなる三要因の集中から発生したが、非常に破壊的なものでした。一〇万人が戦死し、二〇万人が負傷し、人口の六分の一にあたる五〇万人が国外脱出しました。多数の人々が外国への移住を余儀なくされています。レバノンの民間と国家制度は崩壊し廃墟になりました。かつての誇り高き国は、今や、よろめき歩いています。緊張緩和のためには、広範囲にわたり改革が要求されます。戦争終結のために、レバノンを地域の問題から解き放つ必要があるのです。レバノンに恒久的平和をもたらすためには、超大国間の協定が必要です。同時に超大国間の抗争に抵抗しえる全レバノン人の間の内部の強化も必要です。

の用紙に印刷してあるその報告書の真実性を調べるために我々の信頼のできる大人に調査依頼した。その回答によれば、ハリナリ氏は民兵間の政治と治安の会合に一度も出た事がない事がわかった。私が強調したいのは、われわれの人民の大激変は民兵の指導者を孤立させ、包囲するだろうという事です。組合主義者の運動は、何回も彼らをボイコットしたことがある。我々はペイルートで民兵の協定を包み隠すために協力した偽証者たちの眼前で何十回もドアを閉じる事に成功している。それゆえ分割主義者と統一主義者の間の闘争、言い替えればアラブ主義指向者と「シユービヤ」指向主義者の間の闘争にはまだ決着が着いていないのだ。

でレバノン問題について話し、また質問に答えられる機会を与えて貰つた事を光栄に存じ上げます。レバノンはもはや独立の実存ではないとか一〇年におよぶ苦悩にただれたこの問題は、解決不能な事実であると言われてきました。しかし、それは事実ではありません。我々が大問題に直面していることは事実です。しかし問題解決の大きな可能性をもつてゐます。レバノンで起こった問題とはなんであつたのかを断定し、いかにこの危機から脱出するかをもまた断定し、取り扱いを可能にする事ができると考へています。大まかに言えば、我々レバノン人は悪徳の犠牲になってきたということです。我々は中東において、ユニークな民主主義の中で生活を楽しんできました。レバノンの自由と生活水準の高さ、教育水準の高さは有名なものでした我々は常に我々に答えられないこの地域の配句こそむく、これらの我々

変革を受け入れず繁栄と自由と幸福を感じていたのです。レバノンは自由な社会的秩序を楽しんでいた、そしてそれは揺るぎないものだと確信していたのです。それゆえに、身近のレバノンの問題を無視した国際的運動や思想や汎アジア、汎アラブ問題について、心配し反応し集中したものでした。聖アグスティーンの説明的文章に置き換えると、我々は魂を尋問される事なく、神々の神秘の山の中に放置されたままの人々のように行動したのです。

レバノン政府はその国家と市民を究極的に毀かす巨大な政治問題を育成することを許すように、論争中の大問題を避ける舵取をする傾向にあつたのでした。一九六九年以來蓄積した、不吉な緊張の跡を追つて戦争が勃発した時、国家は戦争をとめるべき正しいイデオロギーも、鍛練も魂もそして手段も持ち合わせていなかつたのです。半世纪の間、レバノン

十分社会の民勢統計学的な変化に適応することができなかつたのです。公式が採用されてゐるにもかかわらず、少数の人々がその改善が必要と考えてはいました。改善を求めた人々は、行動のできない対話者を世話を外部のコネクションを使って、宗教的な象徴主義と政治軍事的身元証明により、一九七〇年の始めの過熱した政治風土の中でそれを要求しました。民族的証明の妨害の構造はレバノンを相対的に弱めました。市民にとつては危機に答えられなかつたけれど、個人または雑多なレバノン社会のグループの間ではそうではなかつたのです。簡潔に言えば、レバノンの国家だけでなく、レバノン人の一人一人にとつてもあらかじめ暴風雨にそなえはできていなかつたのです。一九四〇年代にレバノンがアラブ同盟と国連機構の設立に参加した時には、国連委任統治の後に出現した数少ない憲法上の民主国家の一

レバノン・アミン・ジエ  
マイエル大統領の国連外  
国関連協議会での演説

結集している者たちは、民兵戦  
終結を承認するかもしれないけ  
ども、憲法に関する協約の法文化  
の彼らの民兵組織の孤立は承認  
されない。また、イスラム・グループ  
を代表していない、またペイ

の思想を防衛する事ができたのでした。結果的に、我々のこの思想は巨  
大な重圧の下に与えられていたのでした。レバノン人はレバノンをもち  
ろんのことと考えていました。レバ  
ノンは革命的変革がその周囲と環境

ンは個人的な方面の大成功にまきこまれていました。公共の方面に迷惑をかけてその面では多大な発展を勝ち取っていたのです。この事態は、政治的象徴主義と忠誠心の度合と國家の証明に否定的にかかわりあう事

た。ずいぶん、度々この地域と国際的な考慮すべき諸問題により強調された恐怖と疑惑で支配される事がありました。今日、両国は他とは異なる関係性の強化のために親しく一緒に共同しています。そして、シリアは、戦争終結にむけて我々を助ける大きな努力を支払っています。過去にシリアに対立していた派閥も今は共同しています。このことは、重要な肯定的な発展であります。私は、アサド大統領と親しく、レバノンの主権回復、統一、独立を回復する法制化のために共同しています。とともにサウジアラビアは、我々を助けています。中東問題で、米国もまたレバノン問題に関与しています。しかし、米国はあまり助けてくれてはいません。米国は戦争終結のためのあらゆる種の経済援助を提供できるし、経済成長を助けられます。国連も同様に関係しています。すでにある決定の実行に力強い指導性を發揮します。レバノンの問題は、一夜にして解決しません。悟るべき重要な問題は、それが解決可能だということです。それを解決する決心はあります。そしてそれに向けた前進は始まっています。レバノンの大統領としての私の目標は、新しいレバノンで

ある民主的、独立した、主権の、民兵から解放されたアラブ・レバノンを作ることです。隣国と仕切りを作らない。なぜならそのユニーカな歴史文化的な経験と関係性があるからです。私のレバノンにおける目的はレバノンだけに終わらず、東西に横をかける事もあります。私のレバノンの目的は、自由の地、平等、機会均等、言葉の真の意味での正義などです。

私の信念は、レバノンが親しいシリアルとの両国の利益において充分探究される友好関係で大変豊かに成ることです。

私が大きなスケールにおいてレバノンに抱く目標は、この地の大学であり、銀行であり、世界貿易の中心の役割を再び勝ちとることです。

政府と私は、党とコミュニケーションと個人の権利を保証する新しい政治公式を導き出す意志統一のために努力します。

最後に、我々はレバノン人としての我々の努力を強化しています。そして、どこからの援助であろうと私はそれを搜し求めています。

とくに、レバノンと深い関係のある国や、この地域と世界で、  
変革と再生と卓越を適用する許容

新たにヤンマ戦争の可能性とそれを避けるためのPFLPの主張と立場

力をもつ重要な国からの助けを求めて  
います。

つまり、  
・治安と安定を犯している武装部隊  
を西ベイルートから一掃するため  
・状況を悪化させようとするアラフ  
アトの計画の裏をかくため  
・国家的和解にむけたステップとし  
て、レバノンの国家治安を保障する  
条件を作るため  
と。

アマル運動の軍事指導者および保安指導者が情報をを集め、計画をたて、ペイルート周辺のパレスチナ人キャンプに対する新しい戦争開始の可能性にむけて、準備中であることをこの論説は公けにした。

2 プの治安は民族主義者地区の治安の一部であると強調してきた。これらのパレスチナ勢力は、レバノンの独立、アラブとしての性格および、その民主的発展を保障する民族的民主的プログラムをベイスとするレバノンにおける民族的和平にむけたあらゆる努力を支援している。なぜなら、これらすべては、敵シオニストに対するパレスチナ人の闘いにとって有益

1986年1月20日 第6号 月刊 中東レポート

危機が一つの機会た

危機が一つの機会たりうるとすれば、我々はレバノン国家を改革し、周囲の環境との関係をはつきり規定し、直面している挑戦に負けず争うことの可能な機会を持つてゐるといえます。また、国内的努力と国際的努力があれば、一九二〇年から一九七〇年の間のわが誇り高きレバノンの黄金時代以上のよりよき強力な時代を実現する事ができるでしよう。すべてのレバノンの派閥と民兵は、現在解決に向けた協定は、力にたよらず対話を実現すべきだということと、戦争はレバノンの苦悩をより深くするだけだという事を悟っています。戦争は問題解決を遠のけるだけだし、戦争が死者と破壊をもたらし、暴力は国家的自殺の細い道だといふことを悟っています。これは新しい事です。すべての戦争に携わっている人々は互いに話し合いを始

しかし、誰もそれを望んではいません。彼らは、他の問題に手出しうる前に、確固とした基礎の上に国家建設する事に焦点をあてるべきだと悟り始めています。市民権の概念は、過度の個人主義とほんやりとしたスケールの忠誠心の犠牲として吸収されました。分派たちは、平和手段での変革の適用に賛成しています。彼らは、いまだ改革の適用範囲に賛成していないが、我々はくいちがいに橋をかける努力をしています。我々は、レバノンのすべての分派の代表を巻き込んだ新しい憲法の公式化の計画をすすめているのです。国家は以前に公共の方面から注目されていましたが、強力な国家がかつて以上に平和維持とその行政の施行に十分なようになることを望んでいます。それは

諸国との明確なそして親しい関係へと民族結合をつくる方向に大きな一步を踏み出しています。アラブ・レバノンはアラブ問題で、より効果的で、より行動的で、より安定したものになるでしょう。それに応じて、新しく安定した基盤は、偉大な自由と、レバノン移民と彼らの子孫が住む新しい世界と歐州との通商関係と伝統的文化の価値を高める信頼を許すでしょう。アラブとしての証明はレバノンの外部的コネクションと、新しい意思統一と、新しい公認の承認をあたえるでしょう。大きな地域のかかわりの三つの問題は、ある意味ではレバノンでの安定と進歩と平和のためになる解決がなされたのです。全レバノンの派閥は、現在ペレスチナ人の横暴と政治軍事的地位は、間違っていたし、二度と繰り返すべきでないと考えています。一九四八

び掛けます。レバノンにおけるイスラエルの影響は、イスラエルの今年の夏の部分撤退以降減退しているのです。このイスラエルの影響力の減少は、すべての派閥の間に有罪の決定を育成しつつ同伴させられました。これは重要な発展です。レバノンは戦争の運命によって、そのがつちりとしたアラブとのコネクションに限界のある、短命な、戦術的な利益を課すことで自らを犠牲にする事はできないのです。イスラエルを囲むアラブ諸国とのイスラエルとの関係性はエジプトを例外としても、一九四九年の休戦協定によって定義されています。レバノンは、それと離れて、イスラエルとの関係性を新しく定義する別の道を歩む意思はもっていません。

我が政府が友人たちの援助の下、取り除こうとする努力を結びつけて考えていただけだと思います。その結果は本当のところめざましいものではありません。しかし、少しずつ前進はしています。我々は、努力を持続するつもりです。

めました。そして、新しいレバノンの指標についての起草に共同しつつあります。たくさんの政治的改革についての要望は、種々の派閥から出されており、それらは互いに大きな違いはありません。レバノン分割とそれからの脱退を信奉するものは誰もいません。レバノン人は現在、レ

国家の不在が民意の被害を被るだけだということを感じているからです。民兵の解体の要求と、国家諸機能を国家に返すようにすべきだとする意見の一一致が生まれつつあります。國家としての身分証明の問題は、決定的に解決されました。レバノンのアラブ国家としての証明という事では

年以来、レバノンに難民としているパレスチナ人と国家の名簿にきちんと登録してあるパレスチナ人は、難民としての長く虐待された旅の解決するまで、我が国の法律に従つて滞在する事を歓迎します。レバノンはパレスチナ人の自決の権利を支持しつづけるものです。この地域の最終

は、血縁に根ざした強固な絆をうちたてきました。

この感情ゆえにアラブの郷土と移民の絆は、決して冷える事なく、否むしろ一層暖かく生き生きとしたものに成ってきたのです。それゆえに幸に相互訪問が、また感情的相互作用、心痛の変移が、移住者と故国に留まっている人々の間で行われてきました。移住した兄弟たち、息子たちへの我々の愛は、我々の心を満たすほど大きなものです。それは、画者をわけへだてる距離やわけへだてる時間によっては決して弱められる事のない愛です。

あなた方がどんなに遠くにいたとしても、我々の心からあなた方の存在が消える事はありません。

父親は、息子を忘れる事ができるでしょうか。息子は父親を忘れられるでしょうか。あるいは兄弟同士、母娘、姉妹がお互いに相手を忘れる事ができるものでしょうか。

あなたの方のうち何人かはすでに母国を訪れた事があるでしょうが、他の何人かにとっては今回が初めての訪問であり、母国については父祖や書物等から、見、聞きした事以外何も存じないかもしません。

あなた方が一族の方々から聞いて

きた郷土に関する事柄も、実際はさらに良いものへと大きく変化しているし、あなたの方の住む国々のマス・メディアが伝えるものにはいくつかの真実も含まれているかもしれません、不正確な、あるいは歪曲されねつ造された情報が多くあります。それは郷土との絆を弱める目的をもって行われているのです。

我らが民族の敵どもはこうした絆を切斷しようとしたくらみ、またその絆がアラブ系移民社会の中で影響力を持たぬようにするために、移民間にさまざまな相違をつくり出そうとしています。

我々は友誼の真実、その眞の意義を純粹に信じています。我々はあなた方が固く團結する事を望み、また我々自身と米州諸国における我らが兄弟、息子たちとの絆を一層強化するためにはじめに勤いでいますが、同時にそれと同じ強さで、あなた方に我らが郷土の良い伝達者となり、わがアラブ民族とあなたの方の移住先の人民との間のかけ橋となる事をも、求めねばなりません。我々は、我々が常に彼らの大義を理解しようと努めてきたように、彼ら米大陸の諸国人民も我々の眞実と大義を理解して欲しいと望んでおり、そのためにはじめに努力して

な役割を担っています。アラブ民族と米州諸国人民間の関係強化のために、あなた方がこの役割を最善の方法でもって果たしてくれる事を我々は期待しています。

人民間の理解と友情こそ、諸国間の健全で良好な関係確立のための最も良の手段であり、最強の基礎である事を信じています。諸国人民が互いに他を知り、その大義を理解するようになつた時、國家関係は相互理解に基づいたものとなり、正義や平和といったこの世界のあらゆる善良なものの大拡大に対する支持の中での相互の要求によって特徴づけられるものとなるでしょう。

諸人民間に確立される友好協力関係は、人類が直面している困難な諸問題の多くを解決し、世界の人々が耐えている痛みの多くをいやし、安全、平和、福祉に向かっての行進を鼓舞する事に貢献するものです。

近代史があなた方に教えている通り、我々は、長い間、植民地化と分割計画の被害者であり、帝国主義の陰謀とその覇権主義的目的の犠牲者であり、アラブ民族主義の犠牲の上に拡張を求めるシオニズムの侵略の被害者でした。それは、こうした國

国からの入植者によつてたてられた  
一連の計画であり、第一次大戦以来、  
あるいは策略をもつて、あるいは武  
力によつて、彼らの手で実行されて  
きたものです。彼らは、アラブ世界  
を分断し、各國を一層小国へと分割  
しようとし、陸、海、空にわたつて  
しめるために、彼らのヘゲモニーと  
コントロールの下に従属させようと  
してきました。そうして、我々に何  
らの非がないにもかかわらず、我ら  
が国をさまざまの大危機にさらして  
きたのです。こうして彼らは人的、  
軍事的、財政的、経済的、政治的支  
援といつたあらゆる可能な手段を用  
いてイスラエルをつくりあげ、支え  
てきたのです。正義の声も、国連の  
諸原則に対しても聞く耳を持たず、  
自ら信じると述べたあらゆる原則さ  
え無視して、彼らはイスラエルに侵  
略と拡張を煽りました。

我々は幾つかの試練に直面してい  
ますが、我らが人民は常に彼ら以上  
に強く、これらの試練に打ち勝つて  
きたのであって、新たな試練にも打  
ち勝つて、誇りと強さと威儀とを保  
ちつづけるでしよう。我々は、植民  
地化に対し戦い、植民者を、我らが

4 これらの勢力は、孤立主義者の企ておよびその同盟者に對決するため、レバノンの民族主義勢力と共に常に闘つてきた。

- ・ キャンプの我が人民に鉛をむけようと今準備している者は客観的に自らを孤立主義者、イスラエルの塹壕の中に見出すだろう。
- ・ 今、緊急に動き、いかにして、相互の軍事的関係を強化しかにそれを防衛するのか、討議するためレバノン民族主義者とパレスチナ勢力間の会議をもつ時である。
- ・ パレスチナ人キャンプに対し開始されようとしている戦闘への参加の最大の危機を避けること。
- ・ 我々は、我が人民が彼ら自身と彼

「アラブ領土はアラブのもとにとどまるだらう。シリアは諸権利に関して妥協は拒否する。エジプト人民の意志は決して挫けない」

一〇月二六日、ハフェズ・アサド大統領は、第一回米州諸国アラブ系議員会議の開幕に臨み国民に向けての演説を行った。以下は、全文である。

本会議開催というアイデアは本来崇高な目的を持っていました。即ち、我らが人民の移民社会の代表たちの、母国の土の上の再会ということです。

良い環境の中で育まれた良い考え方とと同じであり、共に豊かな実りを

つまりこの種の会議は、我らが人民の移民社会と出身社会間の直接的なコミュニケーションをもたらすだろうということです。

我々はそれを展望し、そのためには熱烈に活動しています。それは、歴史を通じかつ大地と海と巨大な空間をこえて育まれてきた、切れる事のない絆の広がりです。

そうした結合と同時に、我々は、移住した我々がアラブの兄弟たちのその新たな祖国における連帯と団結の強化にも努力を払っています。

我々は、第一回米州諸国アラブ系議員会議開催を心から喜ぶものです。さらにそれがダマスカスで——偉大な歴史をもつた都市、アラブ史上かつてないすさまじい侵略攻勢の中にあってアラブの強固さと真髓の胸壁となつている都市ダマスカスで開か

国がその客賓を歓迎するようではなく、人が実の兄弟を迎えるようですね。というのも、あなたがたは親愛なる親戚であり兄弟だからです。あなた方、あるいはあなたの方の祖先は、さまざまな環境下で諸国へと移住していきました。痛みと母國への関心があなた方の心を占めつづけてきた限り、あなた方は、その血縁をむしろ保ち続けてきたのであり、決して故郷を遺棄して移住していくのではありませんでした。血族に對する、そしてあなた方自身が、あるいは父が、祖父が小さかった頃遊んだ土地への郷愁は常にあり続けたでしょう。あなたの郷愁は、郷土の、あなた方に對する思いによって報われています。あなた方が郷土を思いこがれる強さは、また、郷土があなた方を思いこがれるそれです。呼び掛け合う、この相二つの慕情

アサド大統領、国民に演

資料(11)

であるから。

らの武器を守る権利を主張しているので、我が人民への攻撃を準備して、ある者に彼らが、敵の計画こ

生み出すものです。  
生まれたばかりの  
中の種子と同様、

れる事に一層の喜びを感じるもので  
す。

れる事に一層の喜びを感じるもので  
す。

私個人としても、たゆまぬ努力と  
勤勉、豊かな資質をもって米州社会  
の中に確固たる地位を獲得してきた  
アラブ系著名人士を含むこの崇高な  
会議への参加を喜びとするものです。  
親愛なる兄弟たち。私は心からあ  
なた方を歓迎します。ただ単に招待  
国がその客賓を歓迎するようでは  
なく、人が実の兄弟を迎えるように  
です。というのも、あなたがたは親  
愛なる親戚であり兄弟だからです。  
あなたの方、あるいはあなたの方の祖  
先は、さまざまな環境下で諸国へと  
移住していきました。痛みと母国へ  
の関心があなた方の心を占めつづけ  
てきた限り、あなた方は、その血縁  
をむしろ保ち続けてきたのであり、  
決して故郷を遺棄して移住していく  
のではありませんでした。血族に  
対する、そしてあなた方自身が、あ  
るいは父が、祖父が小さかった頃遊  
んだ土地への郷愁は常にあり続けた  
でしょう。あなたの郷愁は、郷土  
の、あなた方にに対する思いによって  
報われています。あなた方が郷土を  
思ひこがれる強さは、また、郷土が  
あなた方を思ひこがれるそれです。  
呼び掛け合う、この相二つの慕情

国からの入植者によつてたてられた  
一連の計画であり、第一次大戦以来、  
あるいは策略をもつて、あるいは武  
力によつて、彼らの手で実行されて  
きたものです。彼らは、アラブ世界  
を分断し、各国を一層小国へと分割  
しようとし、陸、海、空にわたつて  
アラブ諸国を彼らのための原料供給  
地、商品市場、軍事基地へと転化せ  
しめるために、彼らのヘゴモニーと  
コントロールの下に従属させようと  
してきました。そうして、我々に何  
らの非がないにもかかわらず、我ら  
が国をさまざまの大危機にさらして  
きたのです。こうして彼らは人的、  
軍事的、財政的、経済的、政治的支  
援といつたあらゆる可能な手段を用  
いてイスラエルをつくりあげ、支え  
てきたのです。正義の声も、国連の  
諸原則に対しても聞く耳を持たず、  
自ら信じると述べたあらゆる原則さ  
え無視して、彼らはイスラエルに侵  
略と拡張を煽りました。

我々は幾つかの試練に直面してい  
ますが、我らが人民は常に彼ら以上  
に強く、これらの試練に打ち勝つて  
きたのであって、新たな試練にも打  
ち勝つて、誇りと強さと威儀とを保  
ちつづけるでしょう。我々は、植民  
地化に対し戦い、植民者を、我らが

土地の占領とその永久化は、それに固執するイスラエルによつてアラブに課された前提条件となつてゐます。国連憲章と国際法は、武力による領土占領の不承認を強調し占領兵力の無条計の撤退をよびかけています。それらに反し、イスラエルは、占領と撤退拒否をつづけています。この事こそイスラエルによるアラブへの前提条件であり、人類の意志と法に対する挑戦であります。アラブに対して、前提条件をつけるなと訴えるとき、その人々は、実際にはアラブではなくむしろイスラエルがなし得る事を求めてゐるのです。イスラエルは、前提条件と付隨した諸条件を我々に課し、それらを我々が快く受諾することを望んでいます。彼らはエジプトに課した桎梏を全アラブ世界にまで拡張しようと考えていました。しかし、シオニストどもは失望させられました。鉄かせをはめたと彼らが考えたエジプトは、それを打ち碎くために立ち上がつています。

エジプト人民は、キャンプ・デービッド協定が一片の土地をも解放しない事、ただ、全エジプトを巻き込むためにシナイのかせをはずしただけである事を認識しました。この認識の上に、エジプトの人民はシオニス

トの「教え」によってデザインされたキャンプ・デービッドで铸造された鉄かせを打ち碎く決起を開始しました。欺瞞、歪曲、偽装にかかり無く、この協定は用をなさなくなっています。エジプト人民が、その正体を見破つたからであり、桎梏、屈辱、侮蔑を受容しえないからです。侵略者、帝国主義者、その協力者どもの面前で、エジプト大衆は叫んでいます。エジプトの眞髓、エジプトのアラブ性、エジプトの自由のために選択の余地はない、と。いかなる手段を用いようと、エジプト人民の目を晦ます事はできません。いかなる抑圧の手段を用いようと、エジプト人民の意志を抑えこむことはできません。現在、我々は人民がいかにさまざまな形態で怒りを表明しているかみることができます。カイロでシナイで、南レバノンで、この怒りはさまざまに表明されています。英雄的殉教者アリ・トルバ・ハッサンは、エジプト人民の意志の体现であり、エジプト人民の英雄です。その行為は、エジプト人の潜在した怒りを体现しました。『ハッサン』が爆弾車で南レバノンに行き、イスラエル兵と諜報員どものど真ん中で彼自身も含めて爆破した時、彼は、全ア

ラブ全世界の人民にこう言いたかったのです——エジプトはイスラエルの保護国にはならない、屈辱は甘受しない、イスラエルの壊となる事はない、なぜならば、エジプトはかつて対イスラエルのアラブの戦いを常に率いてきたのだから、と。そしてまた、かれ自身、シリア、レバノンの兄弟たちと、投降と覇権を拒否するアラブと、共にイスラエルに對して戦おうとしている数百万のエジプト人民の一人なのだ、と。

エジプトの殉教者たちに栄光あれ。エジプト人民に栄光あれ。

エジプトの全市民は、一〇月戦争のさ中、エジプトと手に手をとつて誠実に戦い抜いたシリアが、これまでも、将来においてもエジプトの側にある事、そしてこのことをいついかなる時でも行動に移す用意があること、この事實に信頼を持たねばなりません。

我々はエジプトについては、他の人が、好意からにしろ悪意からにしろ語るような方法を持つては語りません。端的にいって、米国に支持されたイスラエルの意図が、エジプトを孤立させシリアルから離れさせたのです。この孤立は、エジプトの意志が勝利的に顕在化した時打ち破られ

一つの強固な、うちかためられた家族の再結合がもたらされるでしょう。現在起こっているさまざまな事はかつてのエジプトの歴史の中でも起きた事ですが、エジプトの「意志」は勝利してきました。エジプト史の内に起きたことと言うのは、大きな意味でキャンプ・デービッド協定と同様の協定がかなせられたことです。当時、幾人かの支配者は協定を承認したが、エジプト人民は、屈辱と、彼らを彼らの民族から離れさせる企画に抵抗し、勝利したのです。彼らはアラブの枠に戻ってきたのです。我々は、かつてそうしたように、必ず再開し、我らが誇りと真髓、自由と全権利を守り抜くでしょう。個々人は涙の中にたおれるかもしれません、が、人民は違います。イスラエルの方は、エジプトを行ってきたことを、こんどはレバノンでも行おうとしました。レバノンを侵略した彼らは人々を殺し、あるいは家なしにおりました。

最新兵器をもって町や村を爆撃して莫大な被害を与え、人々を略奪しあるいは破壊し、人々を飢えに追いこすぎにするために、彼らの諸運動

愛する土地から追い出したのです。我々は帝国主義と軍事同盟のコントロール下におかれることに抗し、また、シオニズムの侵略に対しても、それがまだ弱々しいふりをし、平和を求めていた当初から正体を現わしてきた時に至るまで抵抗してきました。その正体——それは、人種主義的拡張主義勢力であり、その侵略の背後にあってナイルからユーフラテスまでの「大イスラエル」の樹立という目標に向かう拡張を助け、励ました植民地主義、帝国主義勢力に奉仕する一つの拡延です。この「大イスラエル」という目標はシオニストどもの心中に深く根ざした現実です。イスラエルの政治家の何人かがこの現実にふれることを頻繁に避けているとしても、他の大部分は、世界各地の数百万のシオニスト侵略者でアラブの土地を満たすためにアラブの追放を呼び掛け、アラブ地主からの土地収用を行っており、決してその公言をばかりません。されではなりません。彼らにとつては平和とは、我々が彼らの土地収奪を認め、我らが地での霸権を承認する

事なのです。それによつて、短期の内に、アラブ民族は無防備となり、民族的、愛国的情緒が弱まる一方、民族としての資質は崩壊していくのです。こうしてすべての条件は整えられ、「大イスラエル」はイスラエルの力によつて実現可能な所まで引き寄せられるというわけです。この時、シオニズムの暗黒はナイルからユーフラテスまでの全地域を覆い、その「約束された国」としての地の上に、シオニズムは全体重と強權を押し付けてくるのです。これがイスラエルの望む平和であり、まさしくアラブの投降を意味しているものにはかなりません。支配的階級に至る以前の現在でさえ、イスラエルは頑迷な軍国主義政策を展開しており、国際的な諸原則、条約、国際法等を一切意に介することなく、あらゆる方面において威嚇と打撃を与へつづけています。無内容で神話的な「教え」を利用してその拡張主義的な意図を断行することをイスラエルは計画しています。時の経過とともに、勢力に支えられた慎重な努力によつて、これらのこととは、あたかも論理的に合法性を有しているかのごとく思われるようになり、我々はそれ

らの受諾を第三者から呼び掛けられるわけです。神話的で無益な「教え」が世界中の多くの人々にとって正しい物となり、閃光がアラブの地にまでいたって、人々の脳細胞の一部を破壊することになります。だがアラブの眞髓と大衆の意志は、こうしたダメージを修復するものです。経験は、この修復というものがあらゆる次元のダメージを残さず覆い、ついには、歴史の奥にそれを求める人によってのみ発見される单なる傷跡へと変えてしまうことを示します。

ありませんので、私は、一例のみあげました。だが、すべての「教え」が現実的にも、歴史的にも矛盾に満ちた空疎なものであると自信をもつていいえます。

イスラエルは、こうしたナンセンスな事をいいもすれば、また一連の侵略をもって体現もしているのです。が、その一方で、国際社会を含むあちこちで平和を語り、前提条件なしの交渉をアラブによりかけています。イスラエルは、国際平和に特別の責任を持つものたちを含む世界の主要勢力が、我々にイスラエルとの前提条件なしでの交渉に応じるよう呼び掛けに至るまでは、あらゆる前提条件を拒否すると、繰り返し表明しています。イスラエル自身が我らが土地を占拠し、撤退を拒否する事によつて我々に前提条件を課している事は、忘れ去られたか、忘れようとされています。さらに、イスラエルは撤退という原則を認めることを拒否して我々に交渉の席に着くよう求めています。その席ではイスラエルは、さらなる条件を求めてくるでしょう。その条件の一例は、屈辱的で霸權主義的かつ姉妹国エジプトに桎梏を課したキャンプ・デービッド協定において宣言されました。彼らが



- 更がみられる。米下院は、対ヨルダン兵器売却を可決するのではないか。

  - ・ワインバーガー（シンガポール）ハイジャック犯の強制拉致問題。米国は、米国民の安全を守る権利がある事を確認しておきたい。
  - ・ヘルツォグ、象牙海岸訪問、外交回復近し。
  - ・レバノン首相カラミ「アマル、軍、レバニーズ、フォーシズ、PSは武装抗争をやめ、国会での論争のみ許される」
  - ・カイロ、学生、反米反イスラエルデモ、四〇〇〇人参加。
  - ・一〇・一七（木）
  - ・レバノン、八月二二日以来初めての国民統一内閣閣議開く。
  - ・U N I F I L 駐留（六〇〇〇人）八六年四月一九日まで延長（七八年以来一八回目の延長）。
  - ・南部レバノンS L A の「希望の声」放送局に対し、レバノン国民抵抗戦線としてレバノン共産党戦士五名が決死攻撃、爆破（六月以来一二回目のセキュリティ・ゾーン内での攻撃）。
  - ・伊、クラクシ内閣、アキレ・ラウロ号ハイジャック問題で崩壊。
  - ・米上院「対ヨルダン兵器売却は、
  - ・イスラエル・ラジオ イスラエルの進歩派ウリ・アヴナリ氏、ローマで、P L O 駐ローマ代表との記者会見。テロリスト（イスラエルのチニス爆撃、ラルナカ、伊客船攻撃）を批判し、直接対話による和平を提案。
  - ・アミニ、ダマスカスでアサドと会談（三者合意、南部問題、U N I F I L 問題について）。
  - ・レーガン政権、テロリストへの償金発表（数年前のハイジャック犯にも二五万ドル）。
  - ・西ペイント、A U B で車爆弾（五人死亡）。
  - ・一〇・一九（土）
  - ・米エジプト、イタリアに国務省次官ホワイトヘッド派遣。アキレ・ラウロ号事件に関して。「謝罪はしない」と明言（エジプト航空乗っ取りに關しては）。
  - ・ペレス訪米了（三日間）。ソ連がイスラエルとの国交再開すれば、中東和平交渉におけるソ連の役割を認めて良い。また、国連安保理常任理事国がヨルダン＝イスラエル直接交渉を認めてほしい。
  - ・一〇・二一（月）
  - ・アラファト「虐殺がペイント通りで再び始まる。シリアに支援されたファランジストとG C 派の共同で」として、アラブ連盟、非同盟諸国会議、O A U に提訴。アマルのナビーハ・ベリはアラブ発言否定。「アマルと民族勢力を代表して、パレスチナ人のセキュリティ（保安）はまた
  - ・イスラエル直接交渉が実際に開始してから」という条件堅持（七〇対三〇）。
  - ・イスラエル国連大使ベンジャミン・ナタニヤフ、米のエジプト航空に乗つ取り讃美。「テロリストは歐米にとりついている病気だから、これに対するは、断固たる共同の立場と共働の措置が必要」と語る。
  - ・サイダで、キリスト教徒リーダー、サイダ政治議会メンバー、アマル地域代表が会談（ジエジンの状況について）。
  - ・ヨルダン・シリアの両首相、中東和平についてイスラエルと直接的個別的交渉を行わず、アラブサミットの決議にもとづいて行動することを合意。
  - ・米特使ホワイトヘッドとムバラク会談。
  - ・ペレス、中東和平七項目提案（国連で）。
  - ・ヨルダン・シリアの両首長にフセイン・フセイニを再選。
  - ・ホベイカ・カッダム会談。
  - ・レバノン、国会議長にフセイン・フセイニを再選。
  - ・ヨルダン参謀総長、訪米開始。
  - ・一〇・二三（水）
  - ・ホベイカ、ファランジスト党新聞「アル・アマル」を開じる三者合意に反対したため。L F 「合意は成立しようとしている。多分初めてのチャンス。まちがった噂でダメにしたくな。我々は言論の自由を弾圧するものではない」ファランジストのリーダー、エリ
  - ・カーラメ「アミニ派狩りがさらにファランジスト党に對して行われることをおそれる」



質問…経済情況とくに、レバノン  
ポンドの暴落に関しての見解は?  
カリム氏…経済悪化とレバノンポン  
ドの暴落は、砲撃や破壊よりももつ  
と大きな危険性をレバノンにもたら  
している、と考える。レバノンとい  
う国を特徴づけていたものに、二つ  
の点①教育水準の高さと、ポンドの  
安定、があつた。  
この、両方が混迷している。教育  
水準の低下は、レバノンの国家とし  
ての生存理由の喪失を導くし、知的  
優位性をダメにするだろう。この地  
域における知的能力の創造をやめた  
レバノンは、何の役にも立たなくな  
るだろう。そして、ポンド下落の長  
期化は、社会革命の下地になるだろ  
う。

私自身について語ることから始めると、私は、すべての分野における党派（宗派）主義の全廃を望んでいる。非宗教的な発展と、レバノンの現代的な国家システムへの変革を希望している。

回教勢力が宗派主義の廃絶を望み、キリスト教勢力がそれを拒否している、というのは本當だろうか。宗派主義の本当の意味は、何だろうか。宗派主義についての論議が熱っぽく語られる時、私は、それを冷静にとり扱っていきたい。

指摘したいのは、大多数の政治家が、頭でよく考えず、舌先で政治を考えている、ということだ。この問題に關して、もっとも客観的な指導者は、サイヤド・モハマッド・フセ

宗派主義がある  
武器としての宗派主義は、犯罪と  
さえ言える。なぜなら、憎しみをも  
たらし、大衆の争いに宗教を持ちこ  
み、回教徒軍対十字軍の戦闘の次元  
への回帰をもたらすからだ。こうい  
った宗教の巧妙な取り扱いは、抜本  
的に拒否されるべきものだ。

社会制度としての宗派主義につい  
て言えば、それは、個々人の問題に  
宗教法の実施を求めるることを意味し  
宗教法廷の法と宗教教育をともなう  
この問題にに関してすでに国家と宗教  
の分離に容認・賛同しているキリスト  
教徒の側になんの問題もない。し  
かし、この問題は、イスラムが宗教  
であり国家制度であるべきだと考え  
ている回教徒に問われる点だ。

感情——知的な恐迫感もあるか——の存在についてふれておく必要がある。たとえば、全宗派の権力参加という最低限の保障と宗派間の一定の権力均衡という、政治上、行政上の宗派主義を廃止した場合、危険性が二つの方角からもたらされる。すなはち、回教徒とキリスト教徒の紛争悪化がもたらされ、相互に、自派への最大限の権利取得を競うことになる。もう一つは、各宗派間の紛争がさらに悪化し、強大な宗派が弱小宗派の権利まで奪うこととなる。もし、これが実行されれば、弱小な宗派は権力から遠ざけられ、勝者と敗者の宗派区分をもたらすことになるだろう。

チナの紛争に加えて、スンニ派とシーア派の対決が暴力化する徴候をみており、限定しているとはいえ、シーア派とドルーズの紛争も明らかになって来ている。紛争は、海岸線のサイダーハルデ間からダマス街道へと移行していくし、ベカ高原では、シーア派内部の抗争もあじるのは不合理だ。シリアル・パレス

政治的宗派主義（セクタリズム）を温存すべきだと決定し、一方、回教徒勢力は一致して、それを廃絶すべきだと決意している。あなたの個人見解はどうか、そして、この二つの異なる見解の解決はどう達成できると思うか？

カリム氏・あなたの設問の仕方は、単純すぎる、と言わせてほしい。問題はそんなに単純ではないし、両者の立場もそう単純ではない。

古先でなく、よく頭で考えて政治を行っている。この問題で、私は、ファドララア氏と知的な対話をもつことをどんなに望んでいることか。いずれもてるだろう。

その、ファドララア氏との対話への準備としても、宗派主義の三つの特徴について、ここに指摘しておきたい。すなわち、政治的な武器としての宗派主義、社会制度としての宗派主義、そして、権力配分としての

について言えば、回教徒の政治家たちは、すべての地位や指導力に宗派主義を残したまま、大統領の宗派性についての変更だけを問うていて、キリスト教徒がなぜ政治的な宗派主義の全廃に懸念を抱いているかといふと、この提案（大統領の宗派性排除）が、レバノンのイスラム化の厳しい方法を持ちこむことになると考へ、これを拒否しているからだ。しかし、ここで、この史的な恐迫

質問　一月開催予定のアラブ首脳会議は、レバノンの状況にどう反映すると思うか？

カリム氏　現在、アラブ首脳会議の招集は行われそうにない。たとえ、首脳会議が行われても、そこから、何かいい結論が出されるとは思わない。なぜなら、一九七六年のアドカイロの両首脳会議を除いて、レバノン問題に関しては、常に否定的な反映しか得られなかつたからだ。

アラブ諸国家間の紛争状態は、最悪になつてゐるし、レバノン問題のアラブレベルの解決ということには何の望みも持てない。シリアだけがレバノン問題の解決、改善能力を持っている。我々が最も望むことは、最近のアンマン協定にみられるような、ガルフ戦争への臨戦体制によって拡大されて來た幾多の紛争のはね返りが、レバノンにもたらされないようにする、ということだ。

カリム氏・アラファートの戦略的な失策は、パレスチナとレバノンの両大主義を連鎖させてしまったことと、あたかも、パレスチナ人の内部問題でもあるかのように、レバノン問題に介入したこと、である。この失策で、一九八二年に、サイダとベイルートを、次いでその後に、ベカ・高原とトリポリを、アラファートは失った。そして、アラファートは、未だに、この同じ戦略を追い求めている。一九六九年、ヤセル・アラファートは、シリアの援助をうけ、イスラム教徒とキリスト教徒の争いを挑発拡大させることで、レバノンに入ってきた。そして、今は、スンニ派とシリアの紛争を挑発する手段で、反シリアのアラブ諸国の援助をうけて、レバノンへもどつて来ようとしている。それゆえ、シリアの政策は、現在、治安の統制維持を目的にしているし、一方、アラファートの政策は、紛争拡大にますます賭けることになっている。

戦争は続けられるという意味だが、どう考えるか？  
カリム氏・パレスチナ問題とレバノン問題を一つにしてしまうのは、双方の人民に被害をもたらすだけだ。両方の問題が不人気だし、少なくとも両者の一つは、そうだから、レバノン問題とパレスチナ問題を切り離すべきだ。この分離とは、パレスチナイスラエル戦争をレバノンから実際に駆逐することを意味している。もし、パレスチナ、またはイスラエルの、レバノン問題への介入をふせぐということを意味している。もし、サイダとジャジーンの問題が解決できたら、"イスラエルへの門"となつてゐる南部は閉鎖されるべきだし、もしダマス協定がベイルートとトリポリで実行されるなら、ベイルートとトリポリの"パレスチナへの門"も閉じられるべきだ。

質問・ジャジーン問題に、軍事的・政治的な解決が期待できるだろうか？

カリム氏・ジャジーン問題に、軍事的解決はあり得ない。ジャジーンとその周辺地区の共存への意志が、唯一、問題を解決させる。

質問・サイダ・キャンプの治安は工スカラートすると思うか？

カリム氏・サイダは、シリアとパレスチナの、または、シリアとイスラエル紛争の一部に位置しているし、その両紛争とも衝突にむかっているし、治安問題の爆弾だ、といえる。この論点が、なぜサイダは、爆弾だというのかという論理的な確信だ。

質問・西ベイルートの衝突は、他地域にまで拡大すると思うか、西ベイルートどまりと思うか？

カリム氏・衝突は、すでに拡大して

